

心理臨床におけるナラティブと 自己に関する研究の動向

目白大学大学院心理学研究科 森 美保子
目白大学人間社会学部 福島 脩美

【要約】

本論文は、ナラティブと自己に関する内外の研究を展望し、カウンセリングと心理療法におけるナラティブ・プラクティスの可能性と課題について考察することを目的とする。

ナラティブ・プラクティスは、社会構成主義を理論的前提とする臨床実践である。「ナラティブ（物語）」は、「二つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義され、再帰性と関係性の文脈で、語り手と聴き手によって共同生成されるものでもある。また物語論の視座にたつと自己とは、自己物語をとおして社会的、言語的に構成されるものであり、「物語としての自己」という観点は、自己物語の改編による自己の生成的変容や再構築につながると考えられる。近年心理臨床場面では、適用対象の広がりが見られ、さまざまな理論や技法の枠組みをこえて、ナラティブを活用した統合的・折衷的なアプローチが適用されてきている。研究方法としては定量的な実証研究はきわめて少なく、質的研究法による分析がほとんどである。今後の課題としては①ナラティブ・プラクティスに関する実証研究の蓄積、②適用対象とその効果、介入時期や限界に関して、モダリティや条件による相違点の検討、③研究ツールとしての自己対面法の検討などが示唆された。

キーワード：ナラティブ、自己、心理臨床

【はじめに】

本稿は、次の一連の問いに対するナラティブと自己に関する内外の研究を展望し、カウンセリングと心理療法におけるナラティブの活用の可能性と課題について考察することを目的とする。(a)社会構成主義とナラティブ・プラクティスにはどのような関連があるのか、(b)ナラティブはどのような特徴をもち、どのように定義づけられるのか、(c)セルフ・ナラティブ（自己物語）についてはどのように論じられているか、(d)カウンセリングと心理療法において、ナラティブがどのように適用されているか、また適用可能か、(e)どのような効果が指摘され、どこまで実証されており、今後の課題は何か。

臨床心理学やカウンセリング心理学の分野では、1980年代から精神分析、分析心理学、ゲシュタルト療法、ナラティブ・セラピーなどで「物語」が取り扱われるようになった。また塩

路ら(2004)は、対人恐怖の治療過程において、森田療法の視点から患者の語る自己物語の重要性に言及している。そして患者が行う生活史の語りは、自らの「来し方」を見据えることで全体としての自己にふれようとする試みであり、「行く末」をたどっていくための足がかりでもあると指摘した。森田療法における「とらわれ」を「自己組織化」の病理と位置づけ、硬直化した自己に関する物語を再構成する必要性について、森田神経質の定型例と非定型例をあげて考察している報告(杉本・忠井, 2004)もある。

精神分析の新しい潮流の1つとして、ナラティブ・アプローチが浸透してきており、Spence(1983)は、聴き手が物語として聴く過程で、語り手にとっては扱いにくい出来事について意味を共同で再構成することがセラピーの場であると主張した。

分析心理学では河合(2001)が、心理臨床に

おける神話、伝説、昔話のような「物語」の役割についてふれ、心理療法の過程そのものが物語であると述べている。

精神分析においては、現在とつながるかたちでの過去の想起が重要であり（森岡，1999）、転移・逆転移が治療機序の要となる。転移・逆転移と物語の生成および覚醒との関連について検討した報告（皆藤，2001）によると、面接場面ではセラピストとクライアントの双方が無意識に向かって開かれた状態で対面し、「物語」にも転移・逆転移にも無意識と意識を統合する働きがある。この転移・逆転移という概念や無意識への姿勢は、セラピストの「物語」の聴き方が物語の生成に影響を与えることを示している。Spence（1982）は、物語的調合（narrative fit）と名づけられた構成的聴取法のポイントとして、語られた出来事をより早期のエピソードと照合することにより、一見不連続にみえるエピソード間のつながりや類似性がみえてくることをあげている。語られた出来事は不連続の断片にすぎないが、そのなかに連続しているいまだ語られないストーリーを聴き取ることが重要であるといえるだろう。経験と出来事の意味を探求するのに物語のパラダイムは有効である（森岡，1999）。また支配的な物語の文脈からそぎ落とされ、隠蔽された経験としての「例外」は、精神分析的な観点から見た場合、抑圧に近い意味をもつという指摘もある（草島，2005）。

一方、ゲシュタルト療法家のPolster（1987）は、心の調和の回復には対話が必要であるとし、「空椅子」に座らせ対話する方法を提案している。相手との直接の対決を避けたい場合、その相手が「空椅子」に座っていると想定することにより、対話をすることが可能になる。「空椅子」による物語の再著述は、自分の中の多様な部分が分離する方向ではなく、むしろ歩み寄ることを意味する。物語への注目も物語の聴き方など、語り手と聴き手による物語の生成とその共同構成のあり方を検討することにもつながるといえるだろう。

そしてRichert（2002）は、意味づけの広がりにおける経験とその役割に関するGendlin（e.g. 1996, 1997）の研究に基づき、ナラティブと自己概念に対するヒューマニスティック・ア

プローチと実存主義的アプローチの理論的統合の可能性について検討している。

このようにさまざまな理論的枠組みや技法をこえて、ナラティブが活用されているが、本稿では主に過去5年ほどの論文を中心に、心理臨床におけるナラティブと自己の構成との関連や、ナラティブの活用とその効果に関する研究に限って論じることとする。

【ナラティブと自己に関する研究の概要】

1. 社会構成主義（social constructionism）とナラティブ・プラクティス

ナラティブ・プラクティスは、ポストモダン（ポスト構造主義）の哲学を背景にもち、社会構成主義を理論的前提とする臨床実践である。そして社会構成主義の基本的な考え方は、以下の5点に要約できる。(a)現実と言語によって、社会的に構成される、(b)意味のある言語を紡ぎだすことは社会的な実践であり、個人の心の存在を自明視しない、(c)「関係」がなければ、意味のある言説（discourse）は存在せず、意味のある言説が存在しなければ、理解可能な「対象」や「行為」はありえない、(d)「正しい」「よい」という感覚は、共同体の中から生まれる。ただし、その「正しい」「よい」は、その共同体に限定されたものである場合が多い、(e)いかなる主張も評価・批判に対して開かれていなければならない（Gergen, 1994）。つまり、社会構成主義の考え方は、これまでの「現実」に対する認識の仕方を絶対主義から相対主義へと転換するパラダイム・シフトをもたらしたといえるだろう。また現実とは、それについて語られることによって社会的現実になるという考え方は、多くの学問分野でこれまで科学的であるとされていた現実が、いかに偏向したものであるかを示してきた（吉川，2003）。そして、対話は社会構成主義の中心的概念である。人々がたがいに理解するためには対話が必要であるが、その対話においては、既存の理解の構造をいったん保留し、対話の中のテキストの語りかけによって、人はテキストの意味を自らのもつ意味全体（理解の構造）と関係づけることができる。さらには過去の関係からレパトリーをひきだし、ともに意味を生み出そうとすると同時に、人々の

関係は不確定な未来に向って揺れ動いているともいえる。ここで重要なのは、過去から生み出す意味が完全に決まってしまうのではないということ、人々が共同生成する意味は、継続的な改訂のプロセスをたどるといことであろう(深尾, 2005)。

社会構成主義によれば、ナラティブは科学においても、日常生活についても、人々が進行中の関係の中で利用する共同の資源となる。ナラティブは「そこにある現実」を作りこそすれ、反映などしないとされる。ナラティブの特性は文化と歴史に根ざしたものであり、人々が言説を通じて関係を作ろうとすることの副産物である(Gergen, 1994)。

この社会構成主義の考え方は、社会学、心理学、文学、文化人類学、政治学、教育学、社会福祉学、保健学や医学などの幅広い領域で学際的に浸透してきており、その源流は、Berger & Luckmann (1966) の『日常生活の構成 (The Social Construction of Reality)』にさかのぼる。そこで強調されている視点の相対性、社会過程と個人的視点の統合、言語による物象化の過程などは、社会構成主義との類似点としてあげられる。しかし、「個人的主観」と「社会的構造」などの中心的概念は、不明瞭な二元論として社会構成主義では破棄される(Gergen, 1994)。さらには例えば、Piaget (1954) や Kelly (1955) に代表される心理的構成主義 (constructivism) や Schutz (1962) や Mead (1934) などの社会・心理的構成主義 (social constructivism) との類似点や相違点もある。個人の経験世界が構成されるもの (心理的構成主義) であり、個人の知識は社会過程にある (社会・心理的構成主義) とする点は、社会構成主義と立場を同じくするところであるが、社会構成主義では人間行為の源泉を関係性に求め、個人の行動の理解のためにコミュニケーションの重要性を強調している点で心理的構成主義とは異なっている。そして社会と心の二元論の否定や、人間行為の説明の座を関係性に求める点は、社会・心理的構成主義との相違点として指摘することができよう。社会構成主義は個人の解釈という静態的な把握の仕方を超えて、現実に参加するメンバーの相互作用が現実をつくるという動態的過程を

強調しているのである。

このような社会構成主義的観点からみたセラピーは、単に語りの再構成や置き換えの手段ではない。社会構成主義によれば、意味を生み出すより広範な社会過程の中の語りこそが求められる。そのためには、意味の文脈相対性を理解すること、意味の不確定性を受容すること、意味の多様性を探究すること、不変の語りや絶対的なアイデンティティの不要性を理解することが必要である (Gergen, 1994)。そして、言語が人間理解の基盤であるならば、セラピーとは「ある問題についての会話を通じて、新たな意味を見出す言語活動 (Goolishian & Winderman, 1988)」である。すなわちセラピーは、出来事の意味がセラピー参加者たちの地平の融合により変化し、出来事を語る新たなやり方がうみだされ、自己と他者に対する新たな見方が出現する過程であると考えられるだろう。

2. ナラティブの特徴と定義

心理学の分野では、「語り、ナラティブ、物語、ストーリー」などの用語が使われているが、ランダムハウス英和辞典では、narrative は、story より形式張った語で、想像力に富むというより事実描写の物語と説明される。ナラティブは「動詞的概念で、物語る行為の遂行的概念」をさし、ストーリーは「はじめと終わりをもった完結した構造体をさす名詞的概念」として区別する研究者もいる (野家, 1998)。しかしやまだ (2000a) によると、野家 (1998) のこの見解はストーリーをせまく、固定的にとらえずぎで、心理学において story telling (物語ること) と narrative, narration は互換的に使用されている。そして、「物語」は「二つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」と定義される。河合 (2001) も、「物語」は、何かと何かをつなぐ役割をもつとともに、何かと何か「つながれる」ことからうまれてくると示唆している。物語は構造として、出来事を二つ以上必要とし、かならず始めと中ほど、そして終わりがあるという指摘 (Ricoueur, 1983) もある。ナラティブは、経験の具体性や個別性を重要な契機にして、それらを順序だてることで成り立つ言明の一形式である (野口, 2004)。いずれにしても、物語は出来事や経験を「つなぐ」ことから生成

され、「つなぐ」ことから意味もまた生じる。この経験の組織化と意味の行為 (Bruner, 1990) が物語だといえるだろう。したがって本論文では、「物語」をやまだ (2000a) の定義どおり、「二つ以上の出来事をむすびつけて筋立てる行為」ととらえることにする。

また浅野 (2001) は、心理学的な視点からみた物語の特徴として(a)視点の二重性 (語り手と語られた物語の主人公という2つの視点)、(b)出来事を時間軸に構造化すること、(c)他者への志向をあげている。つまり、語ることをとおして語り手は自らの視点とは別に登場人物の視点をもつことになり、この両者の視点は最終的には重なりあう必要がある。また時間軸にそって出来事を選択・配列が行われるのであり、すべての出来事を選択されているものではない。物語は他者との関係性や相互交流の中で存在し、他者の反応によって変化しうるものであるというのが物語の特徴になる。物語がこのようなものであるとすると、物語は事実を伝えるものではなく、むしろ出来事や経験を解釈する枠組みである。その枠組みを構成するのがストーリーであり、経験から意味へ、意味から行為へと移行する過程をストーリーが推進すると考えられる (森岡, 1999; White, 1995)。物語をとおして現実が構成され、その構成はたえず再構成の可能性を内包している。物語は「レンズ」(世界を見るための媒体)、および内的モデル (アイデンティティや行為の導き役) と考えられる (Gergen & Kaye, 1992) が、それは認知療法における認知に対する考え方とは異なり、他者との相互作用によって変化するものだといえるのである (やまだ, 2000a)。

日常記憶や自伝的記憶の研究 (佐々木, 1996; Fivush & Haden, 2003) が明らかにしてきたように、想起は「過去」をそのままの形でひきだすものではない。Polkinghorne (1988) は「現在」の3つの概念として(a)現在における過去の理解、(b)現時点における現在状況の理解 (c)現在理解している未来が縫り合され、統合されていることをあげている。つまり、人は語ることをとおして過去・現在・未来の整合性を確認する作業を行う。また、Sarbin (1986) は物語が過去の出来事、行為を説明するだけでなく、

現在、そして未来の行動をも左右する行動指針として作用すると指摘した。このような時間的展望の観点から、高齢者やその家族を対象に、カウンセラーがライフレビュー (Butler, 1963) を促進するためのツールとして、日記、スクラップブック、セルフ・ボックス、人生図やタイムカプセルなどを活用した報告 (Caldwell, 2005) や受刑者である若い男性にライフレビュー・グループを適用した研究 (Tahir, 2005) がある。そこでは個人の人生経験や人生を形成してきたテーマの理解に焦点をあてることの重要性が示されている。ライフレビューは現在の自己が過去の自己を評価的、統合的にふりかえることにより、過去についての物語が脱構築され、出来事や経験に対する意味づけも変化することが可能なアプローチである。それは単に過去を回顧する言語的な営みであるだけでなく、未来に向けて可能性としての自己を組織化する英知が生み出される行為でもあると思われる。一方 Bruner (1986) は、物語的思考法によって現実とは異なる仮想世界を描けることに注目した。「もし…であったら」という仮定法は過去を回顧するとき用いると後悔に結びつきやすいが、将来的に仮定法を用いると、変えられない過去を納得させ、過去から未来への時間を変える働きをすることができる (やまだ, 2000b)。物語の時間は逆行したり、回帰したり、循環したり、いろいろな流れ方をする。多様な時間軸を設定することが物語の強みであり、物語の時間は多様で多次元の時間軸を扱う視点をひらく (やまだ, 2000a) と考えられる。

3. ナラティブと自己

Ricoeur (1985) は、自己を構成する「ナラティブ・アイデンティティ」という概念を提唱した。この概念は、アイデンティティの概念を物語論に移行させただけでなく、自己に対する見方をも変化させた。McAdams & Logan (2006) は、いかにアイデンティティや人生が、われわれの語る物語の産物であるかについて検討している。また、変化への開放性や自己の構築と変容にとって物語世界への移行は重要である。Harre (2001) は、自己を再帰性と相互作用の文脈で論じているが、自己の構成は自己物語をとおして行われるという考え方は、自分自身を

ふりかえって語るという「再帰性」と過去から未来へと時間軸にそって自分自身を構成・再構成するという「通時性」を組み込んだものであり、他者を媒介した関係性に視座をおいたものでもある。つまり自己とは、他者との関係性のなかで社会的に構成されるものであると同時に、自己を客体化して語るという再帰性の文脈で構成されるものでもある。自己を形成するナラティブとして、自伝的なプロセスについて検討した報告もある(Bruner, 2001)が、それによると、自伝に関する研究には個人のアイデンティティに関する文化的な構成についての考察が含まれる。自己が社会的に構成されるものであるとすると、それはまた、文化的・政治的・歴史的な文脈の影響を受けることにもなる。Brockmeier (2001) は、アイデンティティの構築を、自伝的時間と呼ばれる特殊な時間様式の構造化として考察し、「物語としての時間」に注目した。新矢(2004)によると、再帰性としての自己(the self as reflexively)は、自叙伝というかたちで人に理解されるが、再帰性とは常に内省的にふりかえり、意味をみいだすことであり、そこから物語も変化する。自己に関する語りが柔軟性を失い、機能不全に陥った時、人は物語の書き換えを迫られる。自己物語は、過去の出来事の回想とその出来事に対する解釈や意味づけに依拠している。しかも、その解釈や意味づけは想起時の視点からもたらされたものであり、過去に経験した事柄は変わらないが、それに対する意味づけや解釈は変更や修正が可能である。個人の経験を解釈する枠組みが自己物語であり、「物語としての自己」という見方は、「自己の語り直し」を促し、自己を生成的に変化させることにつながる(やまだ, 2000a)といえるだろう。

4. 書記的方法によるナラティブ

物語は、他者に向けて語られ、伝えられるものである。聴き手が必要だが、他者は目の前にいる聴き手であるとともに、自己のなかに聴き手として想定されるもう1人の自己でもあり、幾重もの聴衆「他者」に向う物語のなかで自己は生成される(やまだ, 2000a)。

書くことの特徴 物語の著述・再著述には自伝、日記、手紙など書記的方法によるものがある。

話すことと比べ、書くことの特徴や利点としては(a)直接的な対人接触に依存せず、自律的である、(b)記録として残る(Weintraub, 1981; L'Abate, 1991)、(c)話すよりも時間がかかる分、自分の考えを整理・統合できる、(d)話すよりも書く方が自己表現できる人がいる(Sloman & Pipitone, 1991)、(e)話すよりも問題に直面しやすく、自己調整のはたらきをもつ(福島・阿部, 1995; Lepore et al., 2002)、(f)ワーキング・メモリーの容量を増加させる(Klein, 2002)などのことが指摘されている。またSloman & Pipitone (1991)は書くことの欠点として(a)直接の対決を避ける手段となって抵抗の形態として働く、(b)相互作用からはなれ、孤独な活動へと力点に移る恐れがある、(c)知的活動で感情の関与が減少する可能性があることなどを挙げた。

書記的方法と感情効果 ドラッグやアルコール依存などのアディクション(嗜癖)に対する治療中のクライアントを対象に、3週間日記を書き、感情語に注目してその日記を読むことの効果について検討した研究では、統制群が設けられていないデザインではあるが、日記によって対象者の自己成長につながるポジティブな変化が促進された(Stephenson & Haylett, 2000)。また書記的方法が心身の健康に役立つためには、出来事を断片的に筆記するのではなく、つながりのある物語として作成することが必要である(Smyth et al., 2001; Pennebaker, 2002)。Wanger (2001)は、深刻なトラウマ体験のある148名の実験参加者を対象に、感情筆記の研究を行い、物語の内容と、気分、認知、心理的な症状の改善を長期間検討し、質的・量的分析を行っている。それによると、ネガティブなライフ・イベントについて書いた対象者はネガティブな感情語を多用し、ポジティブなライフ・イベントについて書いた対象者は、ポジティブな感情語をより多く使用していた。そして、ネガティブとポジティブ両方のライフ・イベントについて書いた対象者も、ネガティブ・ポジティブどちらともとれないライフ・イベントについて書いた中間群より、洞察語や1人称代名詞の使用が増加していた。統計的に有意な改善がみられなかった点はトラウマが高水準であった

ためではないかと考察されている。福島・高橋(2003)は、大学生を対象に内在化した他者との自己内対話と考えられる想定書簡法の感情効果について検証し、想定書簡法によって肯定的な感情の促進と否定的な感情の低減が認められたと報告した。Richeson & Thorson (2002)の研究では、エルダーホステルに参加した高齢者を対象に自伝的筆記を実施し、実施後には有意にネガティブな感情が減少している。Pennebaker (2004)は、感情について書くことの目的の1つは何がおこり、それがどのように自分に影響を及ぼしているかという重要な物語を作成することであると述べ、書くことから効果が得られる人は自分のなかの内省の声を聴くことができる人だと示唆している。そしてどのようなことを語っても他者が受け入れてくれたり、自分が正直に自己開示できる度合いが高い場合にかぎり、話すことは書くことより効果的になると指摘した。換言すると、自己開示に抵抗がある場合には話し、聴くかかわりよりも書記的方法の方が有用だといえるだろう。さらには、多様な視点を持ち、了解不能だと思われた出来事に意味づけをしようとして筆記するならば、書くことは有効であるとし、物語を書き、それを書き直したり、編集し直すエクササイズを提案している。

書記的方法による自己調整 Daiute & Beteau (2002)はニューヨークの学童を対象に、暴力防止プログラムとして書記的方法による自伝的語りと架空の語りを活用し、自己調整の観点から語り筆記が児童の自己探索と自己理解のプロセスとなり、社会認知的・情動的発達を促進することを明らかにした。また元サッカー選手の怪我に関する内省的な書記が、いかに過去の出来事への理解を促し、決定的な人生の転機に対する新たな解釈をもたらしているかということや過去の出来事がどれほど現在の「生きられた経験」の中に反映されているかについて検討した報告 (Gilbourne, 2002) もある。

自伝的書記とライフストーリー 男女の自伝の違いに関する考察としては、Tuval-Mashiach (2006)が、男性の語りは明確に定義されたプロットを好み、年代順に並べられることが多く、一貫性があるのに対して、女

性の場合、断片的で分散したストーリーになりがちで、多様な側面について語りを構成する傾向があると論述した。そしてこれらの傾向はジェンダーとその地位を反映したものであると結論づけている。また Gergen & Gergen (2003)は、16人の著名な男女の自伝を分析し、女性の自伝が身体と自己がより一体化したライフストーリーになっているのに比して、男性の場合、自己と身体との重要な関係性に目を向けるのは晩年になってからだと述べている。つまり、女性は生涯にわたって男性よりも容姿を含めた身体に関する文化的慣習の影響を受け、身体をとおして心を組織化する傾向があるということだろう。

テーマ別の書記とグループでのシェアリングで構成された手引きによる自伝法 (Guided autobiography) は半構造的で、テーマ別のグループ・アプローチであり (de Vries et al., 1995)、実存的で、教育的なナラティブ・アプローチである (Shaw, 2001)。主に高齢者を対象に適用されているが、サイコドラマをとり入れた研究 (Brown-Shaw et al., 1999)、終末期の患者に適用した研究 (Kuhl & Westwood, 2001)、カナダの退役軍人を対象に行った研究 (Shaw & Westwood, 2002)、サイバースペースでの適用に関する研究 (Vota & Vries, 2001) などがあり、心身の健康に良い影響を与える可能性のあることが指摘されている。

ライフストーリーの中には自己形成の中核的部分が含まれる (Pals, 2006)。異なる3名のライフストーリーをとおして、ゲイ (gay) の性的アイデンティティの社会的変化と人生の書記との相互作用について探究した研究 (Cohler & Hammack, 2006) では、人がどのように経験を組織化するか例証となっている。そして書記作業には人生経験をライフストーリーに組み込み、自己のアイデンティティに変換する働きが含まれることを示している。Staupe (2002)は構造化されたライフレビューの書記、手引きによる自伝法、日記、12ステップの筆記プログラムなどをあげ、高齢者にとってライフストーリーを書くことは、スピリチュアルなものへの認識を促し、心身の健康増進効果をもたらすと指摘した。また終末期の患者に漸進性筋弛緩法や

視覚、聴覚、触感に訴えるイメージを導入し、ライフレビューを行ったあとに遺書を書く構造化書記法を適用した研究 (Schwartz & David, 2002) では、対象者の実存的な幸福感が向上している。Pennebaker (2002) は一生を回顧し、再評価することが書記的方法による治療効果を高める要因の1つになると主張した。近年、発達心理学でも生涯発達心理学、文化心理学、エスノ心理学などが提唱され、人生全体を長い時間軸でとらえることの必要性が説かれている (Baltes, 1987 ; 小嶋, 2000)。

また、サイコセラピストとしての自伝が教育分析として役立つことを示した論文 (Serlin, 2005) や Piaget や Wagner の自伝を分析すると、書かれた文書には不一致や矛盾があることから、聴き手によって語りが変化する可能性について示唆した論考 (Voneche, 2001; Schulster, 2001) などもある。

カウンセリングや心理療法の有用性について考える時に、過去の出来事や経験の解釈が固定されたものではなく、現在の時点から構成・再構成されるものであり、聴き手によって変化するものだという観点をもつことは重要だと思われる。語り手は聴き手を前にして、自分が納得するだけではなく、聴き手にとっても了解可能なように語る必要がある。そして、語り手と聴き手、双方の物語の相互作用によって、新たな視点から自己を見直すことが可能になる。つまり語り手の自己物語の改編が促進されるといえるのである。

「対話的自己」とインテラピー Raggat (2002) は自己とは他者との対話によって構築されるとする「対話的自己」の観点から、ナラティブ・アイデンティティの理解には通時的であるだけではなく、共時的なものにも緻密な注意を払うべきだと主張した。インターネット上の少女雑誌や同人誌など、リーディング・コミュニティ (reading community) における女性の自己概念の発達について検討した研究 (Radway, 2002) では、いかにそれらが変化する読み手の反応に影響されているかが指摘されている。またオランダで行われているインターネットによる構造化書記法では、トラウマ体験との象徴的な別れの儀式として手紙が用いられ、

治療効果が認められている (Lange, et al., 2002)。

5. カウンセリングと心理療法におけるナラティブの適用

Hoyt (1998) は構成主義的な心理療法について、人間は自らの心理的現実を単に表出するのではなく、それを構成しながら意味をつくりだす存在だという認識から出発すると解説した。そして、構成主義的心理療法にはナラティブ・セラピー、ソリューション・フォーカスト・アプローチ (solution focused approach)、共同言語システムアプローチ、相互作用モデル、ネオ・エリクソン派が含まれると述べている。

前述したように、言語を媒介にしたカウンセリングや心理療法は、人生を語り直すことによってこれまでの自己物語を脱構築し、再構成するプロセスととらえることができる。

臨床心理学におけるナラティブ・セラピーは、家族療法の発展からうまれてきたものであるが、ある意味で家族療法とは異質のものである (吉川, 2003)。それまで、システム論をよりどころとしていた家族療法に対して、人間関係や問題の定義は、その人のストーリー (物語の仕方) にあるとし、その意味を解釈する方向性が強調された。科学が扱ってこなかった人生の意味に着目することと、それを物語的手法で理解しようとするナラティブ・セラピーは、クライアントを人生の専門家と位置づけ、セラピストとクライアントの関係を対等なものとする。そして、セラピストとクライアントによる「治療的対話」や「無知の姿勢」 (Anderson, 1997) が重視される。

医学の分野においては、Greenhalgh & Hurwits (1998) によって Narrative Based Medicine (以下 NBM) が提唱された。NBM では、医療者と患者間に厳然とした現実が存在するのではなく、医療者と患者、またはその関係者との文脈のなかで、医療の現実が構成されると主張する。また、患者の物語は医療者との相互作用によって創られ、再構成されるというのが NBM の基本的な考え方である。

臨床場面での自己物語の構成と再構成のプロセスを、アセスメントから変化へのゆるやかな移行ととらえたのは Hermans (1995) であるが、田中 (2006) も多くの心理療法において治療者

は診断的視点と治療的な視点の両方をもってクライアントに対峙すると述べ、描画療法は描画を媒介とした対話に他ならないと指摘した。TAT (Thematic Apperception Test) を心理検査として、かつ治療的にも用いた研究 (草島, 2005) では、TAT における語り方と自己物語の語り方の構造には一貫性があることを見出し、TAT 物語と自己物語を比較することによって語り手の解決すべきテーマが推測できることを示している。ナラティブ・セラピーやソリューション・フォーカスト・アプローチにおいても、サイコドラマのようなアクション・テクニクやアート、遊戯、物語の作成、手紙の回覧などを活用した症例報告 (Dunne, 2003; Riley & Malchiodi, 2003; Chang, 1998) などがなされている。

では、近年カウンセリングや心理療法において、ナラティブはどのように用いられているのであるか。

1) 統合失調症者に対する適用

Gallagher (2003) は、自己物語の適切な構築のためには(a)情報の時系列による統合、(b)最小限の自己言及、(c)自伝的記憶のコード化と想起、(d)再帰的メタ認知にかかわる能力といった4つの語り手の力が作用していると述べている。そしてこれら4つの能力の認知的、現象学的、物語論的、神経学的ディテールと統合失調症者の機能不全について彼らの自己物語を用いて解説している。また Lysaker et al. (2001) と Lysaker & Lysaker (2002) は、統合失調症において自己物語がどのように崩壊するのか、サイコセラピーでは自己物語をどのように扱うべきかについて検討し、統合失調症者の主観的な思考の散乱が自己内対話を保持する力の崩壊を示すものであり、外的対話をとおして内的対話を活性化させることが有用であると指摘した。日本においても統合失調症者の語りが具体的な経験として他者に聴き取られ、共有されることにより幻聴が軽減した事例について報告されている (江口, 2000)。

これらは統合失調症を自己意識の崩壊と物語論の観点から理解しようとするものであり、心理療法における1つの可能性を示唆するものである。

2) トラウマからの回復における適用

Neuner et al. (2004) は、ウガンダの難民入植地に住む PTSD (posttraumatic stress disorder) と診断されたスーダンからの避難民43名に4セッションのナラティブ・エクスポージャー・セラピー (Narrative Exposure Therapy; 以下 NET) を実施し、支持的カウンセリング (Supportive Counseling; 以下 SC) や心理教育 (Psychoeducation; 以下 PE) との効果の比較研究を行っている。実証的な検討の結果、介入後1年の時点でもなお、PTSD と診断されたのは NET 実施群で 29%, SC 実施群で 79%, PE 実施群で 80% だった。NET は、認知行動療法と告白療法 (testimony therapy) に基づく短期のナラティブ・アプローチであるが、子どもや青年期の PTSD に対しても有効な治療法であることが事例として示されている (Schauer, et al., 2004)。

戦争による PTSD に対する介入法としては、デイ・ケアで用いられている物語ること (患者にとって必要なことについて語ること) とアートセラピー (トラウマ体験を再体験する) を組み合わせたプログラムについても紹介されている (van de Velden & Koops, 2005)。その他、子ども時代の性的虐待による PTSD に対する統合的介入法としてのナラティブ・アプローチ (Merscham, 2000; Maine, 2005) や、症状に焦点をあて、感情表現を重視したがん患者の PTSD に対するナラティブ・セラピー (Petersen, et al., 2005) などでは、語りが治療や回復の推進力になっている。Stewart & Neimeyer (2001) は、トラウマ体験は「生きられた経験」が出来事を筋立てたり、物語る個人の力を超えてしまったことの結果として生じると示唆している。そしてナラティブ・セラピーの目標にはトラウマに対する意味づけを広げ、多様な意味づけによる物語と支配的な物語とを統合する方法をみつけることが含まれると指摘した。トラウマの治療に対する物語の活用は、トラウマからの回復には知覚レベルの記憶が脈絡ある物語に変換されることが必要だと論じた Janet (1919) の流れをくむものである。また、情動の開示が有効なのは、不快な事象が人生の流れの中に統合されることが可能になるからだといえるだろう

(Booth & Petrie, 2002)。

廣澤 (2005) は、子どもの外傷体験に対して、物語る行為の何が治療的効果をもたらすかについて検討し、子どもの主体性を引き出すことと、象徴的物語として語られることに治療的な意味があると報告した。留意点としては、外傷体験を想起することが必要でない時に行うことはかえって害になるとも述べている。

適用にあたっては、トラウマの重傷度や介入に適した時期についても考慮することが肝要だと考える。

3) 摂食障害や他の障害をもつ人々に対する適用

インターネットによる摂食障害の女性のためのサポート・グループに関する報告 (Walstrom, 2000) では、拒食に苦しんだ著者自身の体験から安全感のもてる場でのコミュニケーションの必要性が説かれ、インターネット上のサポート・グループによって共同構成される物語をとおしてアイデンティティをとりもどす過程について詳述されている。

Novy (2003) は、人格障害と診断されたり、ADHD と診断された思春期の子どもに対する25セッションのサイコドラマを活用したセラピーについて紹介している。それによると、問題とは切り離されたものとして、自分の人生の成功体験について再体験する機会を提供することによって、子どもたちが自分たちの特質や技能に気づき、自信を回復したことが示されている。6歳6ヶ月の学習障害の男子が、自己物語によって自分の苦悩を表現するメタファーをみつけることにより、心配事の軽減と集中力の増進を示した事例 (Palombo, 1994) もある。櫻井ら (2006) は、高機能広汎性発達障害と診断された4名の自伝をKJ法で分析した。自伝はアメリカ人、オーストラリア人と日本人2名の公刊されている自伝であるが、そこから見えてきたのは、(a)困難さは、社会・文化的な背景によりちがってくること、(b)視覚情報への置き換えやマニュアル化による理解など、障害をもつ人たちの持ち味を基盤にした対処法が有効であり、世間の基準に合わせる対処法はうまくいかないこと、(c)自分を閉じることが逆説的に社会適応につながる要因になっていることなどである。

「家族の強み」に焦点をあてた研究では、浅野 (2003) が、発達障害の子どもをもつ4名の母親を対象に、ナラティブ・アプローチによる面接を行い、障害に対する夫婦間の認識のズレを見出している。そして夫婦間のコミュニケーション技能の向上をめざす介入が、「家族の強み」の促進には有効であると指摘した。これらの研究結果は、日本の教育現場においても特別支援教育として軽度発達障害をもつ人々への支援が求められている現在、支援体制を構築する上で有用な示唆となるのではないだろうか。

長崎ら (2000) は、学齢期の難聴児4名の報告活動について縦断的観察を行い、健聴児の報告と比較することで難聴児の物語の発達について考察した。それによると、難聴児の報告内容は、幼児期年長の健聴児よりも他者の行為への言及や時系列化が少なく、その結合の仕方も限定されていた。またそれらのことから、この自己と他者認識の遅れが「心の理論」の発達の問題と関連しているのではないかということや、自己経験や他者経験の物語化が心の理解の発達を支えている可能性が示唆されている。一方、ろう児が手話言語により自己経験を語ることの発達の意義について検討した松崎 (2004) の研究では、幼稚園後半のろう児7名が、同年代と同様の段階で自発的に出来事を多く産出し、かつ複数の出来事を時間的に関連づけて語っていた。そして、この出来事の関連づけやどのような構造で語るかのプランニング、自己編集 (言語心理学によると、物語をまとめて語るときに、あらかじめ何を話すか考えようとする内的活動) といった1次的ことばから2次的ことばへの移行は、ろう児が他者との学びあいのなかで、アイデンティティや文化を形成・共有し、そこで生きる力をはぐくんでいく過程になっていることが示されている。

「フォークサイコロジー (folk psychology)」という概念を提唱したのは Bruner (1990) であるが、スペイン系の行為障害をもつ子どもや青年の治療として、民話や英雄の伝記を活用することが文化的にも感度がよく、恐怖症や不安に対して有用であることを示した報告 (Costantino, et al., 2005) がある。そこには限界として抑うつには有意な治療効果が認められな

かったこともつけ加えられている。また田垣(2000, 2001, 2004)は中途障害者に関する研究から、障害者が障害を人生全体のなかに組み入れてストーリーを構成していくことの重要性や、それにより障害者独自の価値規範を見出す可能性について指摘した。

4) カップル・セラピーやグリーフ・セラピー (grief therapy) での適用

カップル・セラピーにおける物語の活用やカップルがどのように相互に作用しあっているかのアセスメント、セラピストの役割、目標の設定やセラピーに必要なテクニック、治療的な適用法について解説したハンドブック(Freedman & Combs, 2002)が出版されている。またリソースに注目し、夫婦が共有する人生観を行動レベルで確認するソリューション・フォーカスト・アプローチによる介入では物語がより適応的なものへと再構成されている(Hoyt & Berg, 1998)。しかし、カップル・セラピーとナラティブに関する研究は、その途についたばかりであり、数も少なく今後の展開が待たれるところである。

グリーフ・セラピーに関しては、Weiss(2003)が、サイコセラピーを4年間継続中に、成人の息子を慢性疾患で亡くした母親に関する事例を提示した。それによると、自伝的記憶や出来事への意味づけ、関係性などが相互に関連して自己物語の修正が進展している。またアダルト・チルドレンの両親22名から提供された語りによって、重篤な精神疾患をもつ家族のケアに伴う、喪失や悲嘆の感情が明らかにされた(Ozgul, 2004)。Bauer & Bonanno(2001)は、喪失体験のある24歳～55歳の69名を対象に、喪失体験後6ヶ月、14ヶ月、25ヶ月の時点で面接を行い、対象者の語りの分析から、セルフエフィカシーが悲嘆を減少させ、時とともに出来事に対する対象者の意味づけが適応的なものへと変化したと報告している。また研究の観点からは、生のことばで情緒的な体験にふれられる点がナラティブ・アプローチの強みであり、一般化できにくいところが限界であるが、無意味に思えるものなかに意味を見出すことの必要性や、研究者によって語りが誘導されないように倫理的な配慮についても論考されている

(Gilbert, 2002)。日本においても喪失体験からの回復過程について、語りを用いて分析した報告(やまだ, 2000b)がある。

5) その他

Avila(2005)は、神経痛に苦しむ57歳の女性に対して、エモーショナルリー・ホーカスト・セラピー(Emotionally Focused Therapy)、ナラティブ・セラピー、フェミニスト・セラピーを統合したアプローチを適用し、患者の慢性的な痛みによる機能不全の語りの変容について報告した。そして、このアプローチは神経痛患者の循環的な情緒的苦痛に有用だと指摘している。聴き手という存在の重要性の観点から、渡邊(2006)も高齢者の「ナラティブとしての痛み」について考察している。Langellier(2001)は乳がんによる乳房切除の手術後の傷に対して、その意味づけがネガティブなものからより主体的なアイデンティティの物語へと変化した過程について報告し、変化を推進する物語の力について強調した。3名の養子に対して愛着行動のアセスメントとして物語を活用し、養子にとって必要なケアや里親に必要なサポートについて検討した研究(Hudd, 2005)では、アセスメント後に行うプレイセラピーでも、適応的なコーピング・スキルの獲得や消極的な行動の改善のためにストーリー・フォーマットを用いている。Kaptain(2004)は10代の薬物乱用少年の語りから、言説分析を用いて薬物乱用の実態を質的に分析し、理解の糸口を提供した。リフレクション(振り返り、内省)の観点からは、アンダー・アチーバーは、素質が発揮できない状況要因だけではなく、自己物語が妨げになっていることにも気づく必要があるということ(Hermans & Poulie, 2000)や、スポーツ心理学における教育とスーパービジョンのツールとして、リフレクションの有用性が説かれている(Holt & Streat, 2001)。

日本においては下村ら(2004)が、看護学生132名を対象に、物語をとりいれた講義とロール・レタリング(役割交換書簡法)を実施し、グラウンデッド・セオリー・アプローチを用いて分析した結果、学生の患者理解や自己理解が深まり、自己カウンセリングともいえる効果が認められたと結論づけた。また松木ら(2003)

は、前立腺組織内照射を受けた患者4名が、「病の体験」について、看護師とともに語りなおす過程を経て、再発への不安が問題とみなされる方向ではなく、肯定的な意味づけに変化したことを明らかにしている。その他、スクールカウンセリングにおけるナラティブ・モデルや、外在化技法をとり入れたプレイバック・シアターの有用性について論じた報告（藤生・妙木，2002；諸江・羽地，2002）などもなされている。心理臨床におけるナラティブの活用は、その適用対象を広げ、統合的実践へと進展している。

〔総合的考察と今後の課題〕

ナラティブと研究方法論 1940年代以降、心理学における研究方法論として論理実証主義が台頭し、信頼性、妥当性、中立性が重視され、統制的条件下での客観的分析に基づく仮説・演繹法が用いられてきた。それに対し社会構成主義の観点からは、唯一絶対の普遍的理論に対する疑問、科学的手続きの合理性に対する批判、媒介変数による説明に対する批判、法則モデルの人間行動への適用可能性への批判、実験者によるバイアスや実験操作の倫理上の問題等が指摘されてきた（Gergen, 1994）。しかし、Gergen（1999）は、実証研究の利点として(a)実験結果は理論の強力な具体例になる、(b)実験による発見は、ある問題について「現実の生活に根ざした」言葉で考えることを可能にする、(c)実験結果は役立つ予測を生み出すことなどをあげ、実証研究に対し一定の価値と理解可能性を認めている。そして、実証研究への要望として広い対話に貢献できるよう可能性と限界を認識することと、社会に役立つ実証研究を考えることを提案している。Bruner（1986）は、思考の様式には論理実証モードと物語モードがあると主張したが、数量的研究と質的研究は相補的であり、どちらもが心理学的な現象を捉える上で必要不可欠だと思われる。

社会構成主義を理論的背景にもつナラティブ・プラクティスは、相対主義の立場をとり、唯一絶対の客観的事実を前提としない。野口（2002）は、臨床の場を人生の物語が見えかくれする「科学的説明の及ばない場所」であり、

「意味が生起する場所」と位置づけ、そこでは「科学的理解」ではなく、「物語的理解」が主役になると述べている。本稿で概観したように、ナラティブを用いた臨床実践に関する研究では、事例研究やエスノグラフィー、言説分析（discourse analysis）やナラティブ・アナリシス（narrative analysis）、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（grounded theory approach）などの質的研究法を用いて分析したものがほとんどである。Charlotte（2005）は、これら3つの研究法を比較検討し、その相違点について説明している。それによると、グラウンデッド・セオリー・アプローチは研究者の仮説にバイパスを形成する方法を提供し、データに密着した概念を構築するのが特徴であり、心理療法のプロセスの分析などにも適している。グラウンデッド・セオリー・アプローチでは社会的相互作用に焦点を当て、データの解釈過程を他者と共有し、研究結果はそれを応用する人によって検証され、修正されるものであると理解される。また言説分析は臨床家が自己や他者の言説を同定することを可能にし、ナラティブ・アナリシスでは、語りの形式を特定することによって、どのように自分自身や自己の経験について語るのかが検討できる。しかし、Strauss & Cobin（1990）は、質的方法と量的方法を同じ研究プロジェクトの中で効果的に用いることが可能であると提言している。研究対象の多様化が進む現在、質的研究は検証偏重への警鐘でもあるのだろうが、量的研究か、質的研究かという二分法的思考や質的研究の偏重も避けなければいけない。今後は、ナラティブを用いた臨床実践の適用範囲や限界も含め、実証研究による知見の蓄積が望まれる。ナラティブに関する研究法の可能性については、構成主義的グラウンデッド・セオリー・アプローチや構成主義的エスノグラフィー（Denzin & Lincoln, 2000）、研究対象者との共同研究、アクションリサーチ（Gergen, 1999）、ナラティブを手がかりに「現実」の成り立ちを理解し、その「現実」を変更していくためのケアの事後研究やナラティブ・コミュニティの創造、リフレクティング・チームや当事者研究（野口，2004）、モデル構成による一般化（やまだ，2000a）、質的データによ

る数量的研究結果の例証や数量的データの形式を用いた質的分析の妥当性の確認 (Strauss & Corbin, 1990), 筆記によるナラティブを符号化するための方法論 (Dauite & Beteau, 2002) などが提案されている。

自己物語の変容と自己の再構築 自己物語論の観点からみると、自己とは自己物語をとおして社会的に構成されるものである。「生きられた経験」と物語に齟齬が生じ、経験を1つの意味ある物語にまとめられなくなったとき、物語の改訂が求められる。また心理臨床の場とは、他者との関係性のなかで自己内省が生じ、機能不全に陥った物語を再構成し、より適応的なものへと再著述する場であると言いかえることもできるだろう。それはとりもなおさず、断片化したつながりのない出来事を結びつけ、新たな意味づけや解釈をとおして自己を統合し、再構築していく過程にほかならない。そして自己内省とは、「内在化した他者」の声や「もう1人の自己」の声を含む異なる声を受け入れることであり、多様なものの見方が可能になり、新たな選択肢が見出せるようになることでもある。自己は他者との対話をとおしてより明確化されるのであり、適応は客観的な評価に基づくというよりは、むしろ主観的な評価としての個人の意味づけや解釈に依拠していると考えられる。

今後の課題 Hermans, Kempen & van Loon (1992) は、James (1890) の自己論と Bakhtin (1973) の多声性の概念を統合した対話的自己論を展開し、自己物語論の立場から、個人の経験の意味づけに関する研究のための枠組みとして、バリュエーション理論と構造化されたライフレビューの一形態である自己対面法を提案した。そして、自己対面法による過去・現在・未来についての評価的な検討は自己理解を促進し、未来に向けての行動指針になると述べている。一方、つながりのある整合性をもった物語として筆記するとき、書記的方法は心身の健康に役立つものとなる (Smyth et al., 2001; Pennebaker, 2002)。また書記的方法には自己調整の機能がある (福島・阿部, 1995; Lepore et al., 2002)。Lyddon & Alford (2002) はさまざまな年代に対するライフレビューの有用性について言及し、自己対面法は相対的に文化に対してニュートラ

ルであると指摘した。面接場面以外での、書記的方法による自己対面法の適用も効果的ではないかと考えられる。しかし、日本においては自己対面法についての研究はいまだなされていない。今後の課題として、対話的自己論からのアプローチに関する検討も必要だと思われる。

カウンセリングや心理療法においてナラティブは、各理論や技法の枠組みをこえて、実践的統合という形で用いられている。NETなど、短期の介入法も開発されているが、技法の拡張や効率性は時代の要請でもあるだろう。介入時期も含め、それぞれのクライアントにとって最適となる方法を工夫するという観点から、今後も折衷的・統合的なアプローチが進展していくことを期待したい。その際、どのような対象者に、どのような関係性のもとで、どのように適用することが効果的であるのか、また有効でないのかについての研究成果の積み重ねが求められる。また物語の適用にあたっては文化差も考慮する必要があること、臨床場面では Coleman (1986) が指摘したように、想起しないことが適応的な場合もあること、セラピーと研究との境界があいまいになる危険性をはらんでいること (Romanoff, 2001) など忘れてはいけない留意点となるであろう。

構造化されたナラティブの開発や研究に加えて、writing によるナラティブと talking によるナラティブ、Web 上のナラティブ、個別に行うナラティブとグループでのナラティブ、さらにはアートテクニックやイメージ、サイコドラマの活用など、モダリティや条件の違いによって、どのような相違点があるのか、どのような条件が、どのような対象者に効果をもたらすのか、それらについての検証も今後の検討課題である。

ナラティブを適用した臨床実践や研究のさらなる展開を期待して本稿の結びとしたい。

引用文献

- Anderson, H. (1997). *Conversation, language, and possibilities: A postmodern approach to therapy*. New York: Basic Books. (野村直樹・青木義子・吉川 悟 (訳) (2001). 会話・言語・そして可能性—コラボレイティブとは? セラピーとは? 金剛出版)

- 浅野みどり (2003). 発達障害の子どもと生活する家族の強み—強みタイプ別の面接データ分析から— 日本看護医療学会雑誌, 5, 17-23.
- 浅野智彦 (2001). 自己の物語論的接近—家族療法から社会学へ 勁草書房
- Avila, C. E. (2005). Emotionally focused therapy and narrative therapy integrated: Application to a Trigeminal Neuralgia client. Dissertation Abstracts International: Section B: The sciences and Engineering, 66 (4-B), 2295.
- Bakhtin, M. (1973). *Problems of Dostoevsky's poetics*. 2nd. Ann Arbor, MI: Ardis. (望月哲男・鈴木淳一 (訳) (1995). ドストエフスキーの詩学 ちくま学芸文庫)
- Baltes, P. B. (1987). Theoretical propositions of life span developmental psychology: on the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23, 611-626.
- Bauer, J. J., & Bonanno, G. A. (2001). I can, I do, I am: The narrative differentiation of self-efficacy and other self-evaluations while adapting to bereavement. *Journal of Research in Personality*, 35, 424-448.
- Berger, P., & Luckmann, T. (1966). *The social construction of reality*. New York: Doubleday / Anchor. (山口節郎 (訳) (1977). 日常生活の構成 新曜社)
- Booth, R. J., & Petrie, K. J. (2002). Emotional expression and health changes: Can we identify biological pathways? In Lepore, S. J., & Smyth, J. M. (Eds.), *The writing cure: How expressive writing promotes health and emotional well-being*. 2nd ed. Washington, DC: American Psychological Association. pp.157-175. (情動の表出と健康の変容—生物学的影響経路は同定できるか— S. J. レポーレ & S. J. スミス (編) 余語真夫・佐藤健二・河野和明・大平英樹・湯川進太郎 (監訳) (2004). 筆記療法—トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進— 北大路書房, pp.153-169.)
- Brockmeier, J. (2001). From the end to the beginning: Retrospective teleology in autobiography. Series: Studies in narrative. In Brockmeier, J., & Carbaugh, D. (Eds.), *Narrative and identity: Studies in autobiography, self and culture*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.247-280.
- Brown-Shaw, M., Westwood, M., & de Vries, B. (1999). Integrating personal reflection and groupbased enactments. *Journal of Aging Studies*, 13, 109-118.
- Bruner, J. (1986). *Actual minds, possible world*. Cambridge: Cambridge University Press. (田中一郎 (訳) (1998). 可能世界の心理 みすず書房)
- Bruner, J. (1990). *Acts of meaning*. Harvard University Press. (岡本夏木・仲渡一美・吉村啓子 (訳) (1999). 意味の復権—フォークサイコロジーに向けて ミネルヴァ書房)
- Bruner, J. (2001). Self-making and world-making. Series: Studies in narrative. In Brockmeier, J., & Carbaugh, D. (Eds.), *Narrative and identity: Studies in autobiography, self and culture*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.25-37.
- Butler, R.N. (1963). The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-75.
- Caldwell, R. L. (2005). At the confluence of memory and meaning—life review with older adults and families: Using narrative therapy and expressive arts to re-member and re-author stories of resilience. *Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families*, 13, 172-175.
- Chang, J. (1998). Children's stories, children's solution: Social constructionist therapy for children and their families. In Hoyt, M. F. (Ed.), *The handbook of constructive therapies: Innovative approaches from leading practitioners*. San Francisco: Jossey-Bass Inc. pp.251-275. (子どもたちのストーリー, 子どもたちの解決: 子どもやその家族に対する社会構成主義療法 マイケル・F・ホイット (編) 児島達美 (監訳) (2006). 構成主義的心理療法ハンドブック 金剛出版, pp.173-195.)
- Charlotte, B. (2005). Comparing qualitative

- research methodologies for systemic research: the use of grounded theory, discourse analysis and narrative analysis. *Journal of family therapy*, 27, 237-262.
- Cohler, B. J., & Hammack, P. L. (2006). Making a gay identity: Life story and the construction of a coherent self. In McAdams, D. P., Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.), *Identity and story: Creating self in narrative*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.151-172.
- Coleman, P. G. (1986). *Ageing and reminiscence processes: Social and clinical implications*. New York: John Wiley & Sons.
- Costantino, G., Malgady, R. G., & Cardalda, E. (2005). TEMAS narrative treatment: An evidence-based culturally competent therapy modality. In Hibbs, E. D., & Jensen, P. S. (Eds.), *Psychological treatments for child and adolescent disorders: Empirically based strategies for clinical practice*. 2nd ed. Washington, DC: American Psychological Association. pp.717-742.
- Daiute, C., & Buteau, E. (2002). Writing for their lives: Children's narratives as supports for physical and psychological well-being. In Lepore, S. J., & Smyth, J. M. (Eds.), *The writing cure: How expressive writing promotes health and emotional well-being*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.53-73. (生活を書き綴る—子どもの語りと心身のウェルビーイングの向上— S. J. レポーレ & S. J. スミス (編) 余語真夫・佐藤健二・河野和明・大平英樹・湯川進太郎 (監訳) (2004). 筆記療法—トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進— 北大路書房 pp.53-74.)
- Denzin, N. K., & Lincoln, Y. S. (Eds.) (2000). *Handbook of qualitative research*. 2nd. Vol.2. Thousand Oaks: Sage Publication, Inc. (デンジン, N. K.・リンカン, Y. S. (編) 平山満義 (監訳) 藤原 顕 (編訳) (2006). 質的研究ハンドブック 2巻 北大路書房)
- Dunne, P. (2003). Narradadrama: A narrative action approach with groups. In Wiener, D. J., & Oxford, L. K. (Eds.), *Action therapy with families and groups: Using creative arts improvisation in clinical practice*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.229-265.
- 江口重幸 (2000). 病の語りと人生の変容—「慢性分裂病」への臨床民族誌的アプローチ やまだようこ (編著) 人生を物語る—生成のライフストーリー— ミネルヴァ書房, pp.39-72.
- Fivush, R., & Haden, C. (2003). *Developmental and cultural perspectives*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates Publishers.
- Freedam, j. H., & Combs, G. (2002). Narrative couple therapy. In Gurman, A. S., & Jacobson, N. S. (Eds.), *Clinical handbook of couple therapy*. 3rd ed. New York: Guilford Press. pp.308-334.
- 藤生朋子・妙木浩之 (2002). 新しいスクールカウンセリング・モデルの展望と検討 久留米大学心理学研究, 1, 61-69.
- 深尾 誠 (2005). 社会構成主義の理論と実践について 大分大学経済論集, 56, 141-154.
- 福島脩美・阿部吉身 (1995). カウンセリングと心理療法における書記的方法 カウンセリング研究, 28, 212-225.
- 福島脩美・高橋由利子 (2003). 想定書簡法の感情効果に関する実験的研究 カウンセリング研究, 36, 231-239.
- Gallagher, S. (2003). Self-narrative in Schizophrenia. In Kircher, T., & David, A. (Eds.), *The self in neuroscience and psychiatry*. New York: Cambridge University Press. pp.336-357.
- Gendlin, E.T. (1996). *Focusing-oriented psychotherapy: A manual of the experiential method*. New York: Guilford Press.
- Gendlin, E.T. (1997). How philosophy cannot appeal to experience and how it can. In D. M. Levin (Ed.), *Language beyond postmodernism: Saying and thinking in Gendlin's philosophy*. Evanston, IL: Northwestern University Press. pp.3-41.
- Gergen, K. J. (1994). *Realities and relationships*

- soundings in social construction*. Harvard University Press. (永田素彦・深尾誠 (訳) (2004). 社会構成主義の理論と実践 ナカニシヤ出版)
- Gergen, K. J. (1999). *An invitation to social construction*. London, Oaks and New Delhi: Sage.
- Gergen, M. M., & Gergen, K. J. (2003). Narratives of the gendered body in popular autobiography. In Gergen, M. M., Gergen, K. J., Karen, M., & Carolyn, E. (Eds.), *Inner lives and social worlds: Readings in social psychology*. New York: Oxford University Press. pp.301-340.
- Gergen, K. J., & Kaye, J. (1992). Beyond narrative in the negotiation of therapeutic meaning. In McNamee, S., & Gergen, K. J. (Eds.), *Therapy as social construction*. London: Sage. (ナラティブ・モデルを越えて 野口裕二・野村直樹 (訳) (1997). ナラティブ・セラピー 金剛出版)
- Gilbert, K. R. (2002). Taking a narrative approach to grief research: Finding meaning in stories. *Death Studies*, 26, 223-239.
- Gilbourne, D. (2002). Sports participation, sports injury and altered images of self: An autobiographical narrative of a lifelong legacy. *Reflective Practice*, 3, 71-88.
- Goolishian, H., & Winderman, L. (1988). Constructivism, autopoiesis and problem determined systems. *Irish Journal of Psychology*, 9, 130-143.
- Greenhalgh, T. & Hurwits, B. (1998). *Narrative Based Medicine: Dialogue and Discourse in Clinical Practice*. London: BMJ Books. (斎藤清二・山本和利・岸本寛史 (監訳) (2001). ナラティブ・ベイスト・メディスン—臨床における物語りと対話 金剛出版)
- Harre, R. (2001). Metaphysics and narrative: Singularities and multiplicities of self. Series: Studies in narrative. In Brockmeier, J., & Carbaugh, D. (Eds.), *Narrative and identity: Studies in autobiography, self and culture*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp. 59-73.
- Hermans, H. J. M. (1995). From assessment to change: The personal meaning of clinical problems in the context of self-narrative. In Neimeyer, R. A., & Mahoney, M. J. (Eds.), *Constructivism in psychotherapy*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.247-272.
- Hermans, H. J. M., Kempen, H. J. G., & van Loon, R. J. P. (1992). The dialogical self: Beyond individualism and rationalism. *American Psychologist*, 47, 23-33.
- Hermans, H. J. M., & Oles, P.K. (1999). Midlife crisis in men: Affective organization of personal meanings. *Human Relations*, 52, 1403-1426.
- Hermans, H. J. M., & Poulie, M. F. (2000). Talent and self-narrative: The survival of an under-achieving adolescent. In van Lieshout, C. M. F., & Heymans, P. G. (Eds.), *Developing talent across the life span*. New York: Psychology Press. pp.277-298.
- 廣澤愛子 (2005). 子どもの外傷体験に‘物語ること’がもたらす治療効果について 愛知教育大学教育実践総合センター紀要, 8, 269-277.
- Holt, N. L., & Streaan, W. B. (2001). Reflecting on initiating sport psychology consultation: A self narrative of neophyte practice. *Sport Psychologist*, 15, 188-204.
- Hoyt, M. F. (1998). Introduction. In Hoyt, M. F. (Ed.), *The handbook of constructive therapies: Innovative approaches from leading practitioners*. San Francisco: Jossey-Bass Inc. pp.1-27. (序論 マイケル・F・ホイット (編) 児島達美 (監訳) (2006). 構成主義的心理療法ハンドブック 金剛出版, pp.15-35.)
- Hoyt, M. F., & Berg, I. K. (1998). Solution-focused couple therapy: helping clients construct self-fulfilling realities. In Hoyt, M. F.(Ed.), *The handbook of constructive therapies: Innovative approaches from leading practitioners*. San Francisco: Jossey-Bass Inc. pp.314-340. (ソリューション・フォーカスト・夫婦セラピー：クライアントが自己を満たす現実を構築するのを援助する マイケル・F・ホイット (編) 児島達美 (監訳) (2006). 構成主

- 義的心理療法ハンドブック 金剛出版 pp.214-238.)
- Hudd, S. (2005). The use of play and narrative story stems in assessing the mental health needs of foster children. In Schaefer, C., McCormick, J., & Ohnogi, A (Eds.), *International handbook of play therapy: Advances in assessment, theory, research, and practice*. Lanham, MD: Jason Aronson. pp.113-132.
- James, W. (1890). *The principles of psychology*. New York: Henry Holt. 2vols.
- Janet, P. (1919). *Les medicaments psychologiques*. (The medication Psychological) 3vols. Paris: Alcan.
- 皆藤 章 (2001). 物語による転移/逆転移の理解 精神療法, 27, 8-14.
- Kaptain, D. C. (2004). Narrative group therapy with outpatient adolescents. Dissertation Abstracts International Section A: Humanities and Social Sciences, 65 (6-A), 2379.
- 河合隼雄 (2001). 心理療法における「物語の意義」精神療法, 27, 3-7.
- Kelly, G. A. (1955). *The Psychology of personal constructs*. New York: Norton.
- Klein, K. (2002). Stress, expressive writing, and working memory. In Lepore, S. J., & Smyth, J. M. (Eds.), *The writing cure: How expressive writing promotes health and emotional well-being*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.135-155. (ストレスと筆記表現とワーキング・メモリ S. J. レポーレ & S. J. スミス (編) 余語真夫・佐藤健二・河野和明・大平英樹・湯川進太郎 (監訳) (2004). 筆記療法—トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進— 北大路書房, pp.133-152.)
- 小嶋秀夫 (2000). 人間発達と発達研究が位置している状況 小嶋秀夫・速水敏彦・本城秀次 (編) 人間発達と心理学 金子書房, pp. 3-34.
- Kuhl, D. R., & Westwood, M. J. (2001). A narrative approach to integration and healing among the terminally ill. In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (Eds.), *Narrative gerontology: Theory, research, and practice*. New York: Springer Publishing Company. pp.311-330.
- 草島弘典 (2005). TATの使用に関する新たな一提案—自己の物語という視点から— 中京大学心理学研究科・心理学部紀要, 4, 95-107.
- L'Abate, L. 1991 The use of writing in psychotherapy. *American Journal of Psychotherapy*, 45, 87-98.
- Lange, A., Schoutrop, M., Schrieken, B., & Van de Ven, J-P. (2002). Interapy: A model for therapeutic writing through the internet. In Lepore, S. J., & Smyth, J. M. (Eds.), *The writing cure: How expressive writing promotes health and emotional well-being*. Washington, DC: American Psychological Association. pp. 215-238. (インターネット—インターネットを用いた治療の筆記のモデル— S. J. レポーレ & S. J. スミス (編) 余語真夫・佐藤健二・河野和明・大平英樹・湯川進太郎 (監訳) (2004). 筆記療法—トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進— 北大路書房, pp.211-234.)
- Langellier, K. M. (2001). "You're marked": Breast cancer, tattoo, and the narrative performance of identity. Series: Studies in narrative. In Brockmeier, J., & Carbaugh, D. (Eds.), *Narrative and identity: Studies in autobiography, self and culture*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.145-184.
- Lepore, S. J., Greenberg, M. A., Bruno, M., & Smyth, J. M. (2002). Expressive writing and health: Self-regulation of emotion-related experience, physiology, and behavior. In Lepore, S. J., & Smyth, J. M. (Eds.), *The writing cure: How expressive writing promotes health and emotional well-being*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.99-117. (情動の筆記と健康—情動と関連した体験, 生理, 行動の自己調整— S. J. レポーレ & S. J. スミス (編) 余語真夫・佐藤健二・河野和明・大平英樹・湯川進太郎 (監訳) (2004). 筆記療法—トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進— 北大路書房, pp.97-115.)
- Lyddon, W. J., & Alford, D.J. (2002). Life review

- and the self-confrontation method with older adults. In Juntunen, C.L., & Atkinson, D.R. (Eds.), *Counseling across the lifespan: Prevention and treatment*. Thousand Oaks, California: Sage Publications, Inc.
- Lysaker, P. H., & Lysaker, J. T. (2002). Narrative structure in psychosis: Schizophrenia and disruptions in the dialogical self. *Theory & Psychology*, 12, 207–220.
- Lysaker, P. H., Lysaker, J. T., & Lysaker, J. T. (2001). Schizophrenia and the collapse of the dialogical self: Recovery, narrative and psychotherapy. *Theory, Research, Practice, Training*, 38, 252–261.
- Maine, C. (2005). Feminist-narrative therapy: Treating PTSD and substance abuse in women. Dissertation Abstracts International: Section B: The sciences and Engineering, 66 (1–B), 564.
- 松木幸栄・楠 瑞穂・柱山依子・富田静江 (2003). 前立腺組織内照射を受けた患者へのナラティブ・セラピーの効果 日本看護学会論文集 看護総合, 34, 139–141.
- 松崎 丈 (2004). ろう児が自己経験を物語ることの発達の意義 手話コミュニケーション研究, 54, 66–75.
- McAdams, D. P., & Logan, R. L. (2006). Creative work, love, and the dialectic in selected life stories of academics. In McAdams, D. P., Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.), *Identity and story: Creating self in narrative*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.89–108.
- Mead, G. H. (1934). *Mind, self and society*. Chicago: Chicago University Press.
- Merscham, C. (2000). Restoring trauma with narrative therapy: Using the phantom family. *Family Journal: Counseling and Therapy for Couples and Families*, 8, 282–286.
- 森岡正芳 (1999). 精神分析と物語 (ナラティブ) 小森康永・野口裕二・野村直樹 (編著) ナラティブ・セラピーの世界 日本評論社, pp.75–92.
- 諸江健二・羽地朝和 (2002). 自己のナラティブ (物語) を観ること—プレイバック・シアターによる効果の考察— 心理劇研究, 26, 8–15.
- 長崎 勤・鈴木和子・長崎裕子 (2000). 子どもはどのようにして自己物語を物語るのか?—健聴児童と難聴児の報告活動の分析を通して— 心身障害学研究, 24, 123–135.
- Neuner, F., Schauer, M., Klaschik, C., Karunakara, U., & Elbert, T. (2004). A comparison of narrative exposure therapy, supportive counseling, and psychoeducation for treating posttraumatic stress disorder in an African Refugee Settlement. *Journal of Consulting and Clinical Psychology*, 72, 579–587.
- 野家啓一 (1998). 歴史と終末論 岩波書店
- 野口裕二 (2002). 物語としてのケア ナラティブ・アプローチの世界へ 医学書院
- 野口裕二 (2004). ナラティブの臨床社会学 勁草書房
- Novy, C. (2003). Drama therapy with pre-adolescents: A narrative perspective. *Arts in Psychotherapy*, 30, 201–207.
- Ozgul, S. (2004). Parental grief and serious mental illness: A narrative. *Australian and New Zealand Journal of Family Therapy*, 25, 183–187.
- Palombo, J. (1994). Incoherent self-narratives and disorders of self in children with learning disabilities. *Smith College Studies in Social Work*, 64, 129–152.
- Pals, J. L. (2006). Constructing the “Springboard Effect”: Causal connections, self-making, and growth within the life story. In McAdams, D. P., Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.), *Identity and story: creating self in narrative*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.175–199.
- Pennebaker, J. W. (2002). Epilogue: Writing, social processes, and psychotherapy: From past to future. In Lepore, S. J., & Smyth, J. M. (Eds.), *The writing cure: How expressive writing promotes health and emotional well-being*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.281–291. (エピローグ 情動的な出来事の筆記—過去から未来へ— S. J.

- レポーレ & S. J. スミス (編) 余語真夫・佐藤健二・河野和明・大平英樹・湯川進太郎 (監訳) (2004). 筆記療法—トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進— 北大路書房, pp.277-288.)
- Pennebaker, J. W. (2004). *Writing to heal ~ A ~ Guided Journal for recovering from trauma & emotional upheaval*. Oakland: New Harbinger Publications, Inc.
- Petersen, S., Bull, C., Propst, O., Dettinger, S., & Detwiler, L. (2005). Narrative therapy to prevent illness-related stress disorder. *Journal of Counseling & Development*, 83, 41-47.
- Piaget, J. (1954). *The construction of reality in the child*. New York: Basic Books.
- Polkinghorne, D. E. (1988). *Narrative knowing and the human science*. New York: State University of New York Press.
- Polster, E. (1987). *Every person's life is worth a novel*. New York: W.W. Norton & Company Inc. (深澤道子・西本知子 (訳) (1998). あなたの人生も物語になる 日本評論社)
- Radway, J. (2002). Girls, reading, and narrative gleaning: Crafting repertoires for self-fashioning within everyday life. In Green, M. C., Strange, J. J., & Brock, T. C. (Eds.), *Narrative impact: Social and cognitive foundations*. Mahwah: Lawrence Erlbaum Associates Publishers. pp.183-204.
- Raggat, P. (2002). The landscape of narrative and the dialogical self: Exploring identity with the personality web protocol. *Narrative Inquiry*, 12, 291-318.
- Richert, A. J. (2002). The self narrative therapy: Thoughts from a humanistic / existential perspective. *Journal of Psychotherapy Integration*, 12, 77-104.
- Richeson, N., & Thorson, J. A. (2002). The effect of autobiographical writing on the subjective well-being of older adults. *North American Journal of Psychology*, 4, 395-404.
- Ricoeur, P. (1983-1985). *Temps et Récit*. Paris: Éditions du seuil. 3vols. (久米博 (訳) (1987), (1988), (1990) 時間と物語 I II III 新曜社)
- Riley, S., & Malchiodi, C. A. (2003). Solution-focused and narrative approaches. In Malchiodi, C. A. (Ed.), *Handbook of art therapy*. New York: Guilford Press. pp.82-92.
- Romanoff, B. D. (2001). Research as therapy: The power of narrative to effect change. In Neimeyer, R. A. (Ed.), *Meaning reconstruction & experience of loss*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.245-257.
- 櫻井未央・猿渡知子・原田真由美・石井朋子 (2006). 高機能広汎性発達障害者の世界の理解—自伝分析より— 東京大学大学院教育学研究科臨床心理学コース紀要, 29, 172-199.
- Sarbin, T. R. (1986). The narrative as a root metaphor for psychology. In Sarbin, T. R. (Ed.), *Narrative psychology: The storied nature of human conduct*. New York: Praeger Publishers. pp.3-21.
- 佐々木正人 (1996). 想起のフィールド—現在のなかの過去— 新曜社
- Schauer, E., Neuner, F., Elbert, T., Ertl, V., Onyut, L. P., Odenwald, M., & Schauer, M. (2004). Narrative exposure therapy in children: A case study. *Intervention: Interventional Journal of Mental Health, Psychosocial Work & Counselling in Areas of Armed Conflict*, 2, 18-32.
- Schutz, A. (1962). *Collected papers: The problem of social reality*. The Hague: Martinus Nijhoff.
- Schwartz, C., & David, E. (2002). To everything there is a season: A writing expression intervention for closure at the end of life. In Lepore, S. J., & Smyth, J. M. (Eds.), *The writing cure: How expressive writing promotes health and emotional well-being*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.257-278. (何事にも時があり—人生の終焉に向けた筆記表現介入— S. J. レポーレ & S. J. スミス (編) 余語真夫・佐藤健二・河野和明・大平英樹・湯川進太郎 (監訳) (2004). 筆記療法—トラウマやストレスの筆記による心身健康の増進— 北大路書房, pp.253-276.)
- Schulster, J. R. (2001). Richard Wagner's creative vision at La Spezia: or The retrospective inter-

- pretation of experience in autobiographical memory as a function of an emerging identity. Series: Studies in narrative. In Brockmeier, J., & Carbaugh, D. (Eds.), *Narrative and identity: Studies in autobiography, self and culture*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.187-217.
- Serlin, I. A. (2005). Autobiography. In Yancy, G., & Hadley, S. (Eds.), *Narrative identities: psychologists engaged in self-construction*. Philadelphia: Jessica Kingsley Publishers, Ltd. pp.245-260.
- Shaw, M. E. (2001). A history of guided autobiography. In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (Eds.), *Narrative gerontology: Theory, research, and practice*. New York: Springer Publishing Company. pp.291-309.
- Shaw, M. E., & Westwood, M. J. (2002). Transformation in life stories: The Canadian war veterans life review project. In Webster, J. D., & Haight, B. K. (Eds.), *Critical advances in reminiscence work: From theory to applications*. New York: Springer Publishing Company. pp.257-274.
- 下村明子・松村三千子・杉野文代 (2004). 看護教育におけるロールレタリング・ケアリングに通じるナラティブアプローチと振り返りの分析— 日本看護研究学会雑誌, 27, 55-64.
- 新矢昌昭 (2004). アイデンティティの行方— アイデンティティから「わたし」という自己物語へ— 佛教大学大学院紀要, 32, 289-305.
- 塩路理恵子・中村 敬・中山和彦 (2004). 対人恐怖症の治療過程で見られる「自己の振り返り」について— 外来森田療法を行った自己視線恐怖の一例の検討を通して— 日本森田療法学会雑誌, 15, 129-134.
- Sloman, L., & Pipitone, J. (1991). Letter writing in family therapy. *The American Journal of Family Therapy*, 19, 77-82.
- Smyth, J. M., True, N., & Souto, J. (2001). Effects of writing about traumatic experiences: The necessity of narrative structuring. *Journal of Social and Clinical Psychology*, 20, 161-172.
- Spence, D.P. (1982). *Narrative truth and historical truth: Meaning and interpretation in psychoanalysis*. New York: W.W. Norton & Company, Inc.
- Spence, C.D. (1983). Narrative persuasion. *Psychoanalysis and Contemporary Thought*, 6, 457-468.
- Staudé, J.-R. (2002). Autobiography as a spiritual practice. *Journal of gerontological social work*, 45, 249-269.
- Stephenson, G. M., & Haylett, S.A. (2000). Self narrative framing: The effects of systematic written reflection on personal progress in 12-step facilitation therapy. *Journal of Constructivist Psychology*, 13, 313-319.
- Stewart, A. E., & Neimeyer, R. A. (2001). Emplotting the traumatic self: Narrative revision and the construction of coherence. *Humanistic Psychologist*, 29 (1-3), 8-39.
- Strauss, A., & Corbin, J. (1990). *Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques*. North America: Sage Publications, Inc. (南裕子 (監訳) (1999). 質的研究の基礎— グラウンデッド・セオリーの技法と手順 医学書院)
- 杉本未知太郎・忠井俊明 (2004). 自己組織化の病理としての「とらわれ」について 立命館人間科学研究, 7, 171-180.
- 田垣正晋 (2000). 中途障害者が語る障害の意味— 『元健常者』としてのライフストーリーより— 京都大学大学院教育学研究科紀要, 46, 412-424.
- 田垣正晋 (2001). ソーシャルワークにおける中途障害者のストーリーの構成の意義: 脊髄損傷者の事例から ソシャルワーク研究, 106, 43-36.
- 田垣正晋 (2004). 中途障害者を理解する方法としてのライフストーリー研究の意義 ソーシャルワーク研究, 119, 200-207.
- Tahir, L. (2005). The evolving systems approach and narrative therapy for incarcerated male youth series: Path in psychology. In Wallance, D. B. (Ed.), *Education, arts, and morality: Creative journeys*. New York: Kluwer Academic

- / Plenum Publishers. pp.85-101.
- 田中勝博 (2006). 描画とナラティブー絵が語るもの 臨床心理学, 6, 101-106.
- Tieru, S. (2005). The perspective of social construction of self and narrative counseling. *Psychological Science (China)*, 28, 189-191.
- Tuval-Mashiach, R. (2006). "Where is the story going?" Narrative forms and identity construction in the life stories of Israeli men and women. In McAdams, D. P., Josselson, R., & Lieblich, A. (Eds.), *Identity and story: Creating self in narrative*. Washington, DC: American Psychological Association. pp.249-268.
- van der Velden, I., & Koops, M. (2005). Structure in word and image: Combining narrative therapy and art therapy in groups of survivors of war. *Intervention: Intervention Journal of Mental Health, Psychosocial Work & Counselling in Areas of Armed Conflict*, 3, 57-64.
- Voneche, J. (2001). Identity and narrative in Piaget's autobiographies. In Brockmeier, J., & Carbaugh, D. (Eds.), *Narrative and identity: Studies in autobiography, self and culture*. Amsterdam: John Benjamins Publishing Company. pp.219-245.
- Vota, R. L., & de Vries, B. (2001). Guided autobiography in Cyberspace. In Kenyon, G., Clark, P., & de Vries, B. (Eds.), *Narrative gerontology: Theory, research, and practice*. New York: Springer Publishing Company. pp.331-351.
- de Vries, B., Birren, J. E., & Deutchman, D. E. (1995). Method and uses of the guided autobiography. In Haight, B. K., & Webster, J. D. (Eds.), *The art and science of reminiscing: theory, research, methods, and applications*. Washington, DC: Taylor and Francis. pp.165-177.
- Walstrom, M. K. (2000). "Starvation ... is who I am" : From eating disorder to recovering identities through narrative co-construction in an internet support group. Dissertation Abstracts International Section A: Humanities and Social Sciences, 60 (12-A), 4249.
- Wanger, K. T. (2001). Narrative content in positive and negative written emotional expression and long-term improvement in mood, self-cognitions, and psychological symptomatology in survivors of trauma. Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering, 61 (7-B), 3865.
- 渡邊 勉 (2006). 心理学的立場からみた高齢者の痛み 老年精神医学雑誌, 17, 158-164.
- Weintraub, M. D. (1981). *Verbal behavior: Adaptation and psychology*. New York: Springer Publishing Company.
- Weiss, E. L. (2003). A narrative-relational approach to grief therapy with a bereaved parent. Dissertation Abstracts International: Section B: The Sciences and Engineering, 64 (3-B), 1512.
- White, M. (1995). *Re-authoring lives: Interviews & essays*. South Australia: Dulwich Centre Publication.
- (小森康永・土岐篤史 (訳) (2000). 人生の再著述 IFF 出版部ヘルスワーク協会)
- やまだようこ (2000a). 展望 人生を物語ることの意味—なぜライフストーリー研究か?—教育心理学年報, 39, 146-161.
- やまだようこ (2000b). 喪失と生成のライフストーリー —F1 ヒーローの死とファンの人生 やまだようこ (編著) 人生を物語る—生成のライフストーリー ミネルヴァ書房, pp.77-108.
- 吉川 悟 (2003). ブリーフセラピー入門—セラピーをスリムにする (5) ナラティブ・セラピーとNBM 臨床心理学, 3, 866-873.

Review of studies on narrative and self in psychological perspective

Mihoko Mori Mejiro University, Graduate School of Psychology

Osami Fukushima Mejiro University, Faculty of Human and Social Sciences

Mejiro journal of Psychology.2007 vol.3

Abstract

The purposes of this paper are to review studies on narrative and self, and to discuss the possibilities and challenges of narrative practices in counseling and psychotherapy. The clinical narrative practice is based on the theory of social constructionism. A definition of “narrative” is “describing the plot of two or more life events.” “Narrative” is constructed in collaboration with the speaker and the listener in the context of reflexivity and relationship. Meanwhile, “self” is constructed socially and linguistically through self-narrative. From the standpoint of “narrative self,” reorganization of self-narrative may lead to self-generative change or self-reconstruction. Recently, in clinical psychology, narrative practices have become more widely used eclectic and integrated approaches beyond the frameworks of various theories and techniques. However, few studies used quantitative, experimental methods. Therefore, the following issues must be addressed in near future: (1) accumulation of experimental studies on narrative practices; (2) study of applicable patients and their responses as well as differences in intervention timing and limitations depending on modalities or conditions; and (3) examination of the self-confrontation method as a research tool.

Key words : narrative, self, clinical psychology